

第 1 部

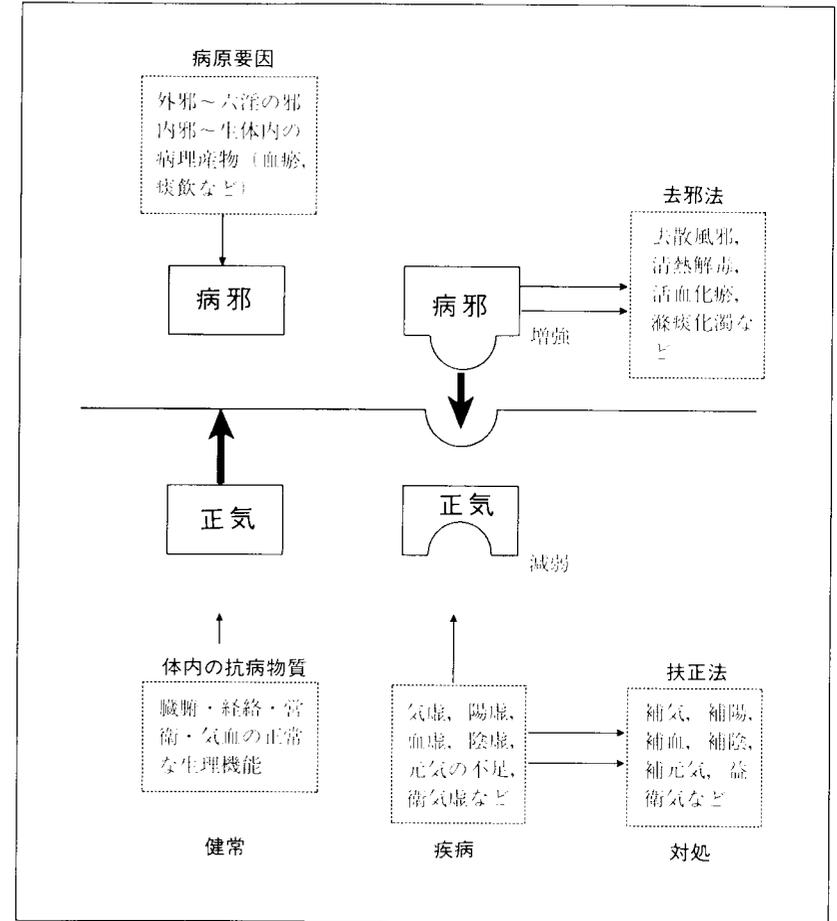
中医学の
免疫に関する認識

第1部 中医学の免疫に関する認識

中医学において「免疫」という言葉が最初に使われたのは、18世紀の『免疫類方』の中であり、その意味は「疫病」の危害を免除するというものであった。「疫」という言葉は、2千余年前の書籍『内経』にすでに次のように記載されている。「五疫の至るや、皆相染まり易る。大小を問わず、病状相似る」。この疫は、明らかに急性の伝染性が極めて強い疾患の一種を指している。したがって、中医学の免疫に関する概念は現代医学における初期の免疫の概念と基本的には一致していて、いずれも感染症の免疫に関係したものであった。ただし、中医の免疫にはさらにもっと広い意味がある。『内経』の精神にもとづくと、「免疫」はけっして単に「疫病」を免除することだけを指すのではなく、一般の疾患も包括する概念であった。『素問』四気調神大論篇では、明確に「已病を治さずして、未病を治す」という「予防を主とする」思想を提起していて、「疫」が広くすべての疾患を指していることがわかる。

では、どのようにして予防するのか？ 人間はどうすれば病気を免れることができるのか？ その方法にはいろいろあり、また病因もさまざまである。中医学は入り乱れて複雑な諸々の病因の中から、ひとつの主要な決定的に作用する病因として「内因」をとりあげた。『素問』上古天真論篇には「真気これに従い、精神内に守る、病いずくんぞ従い來らんや」とある。ここでいう「真気」とは、通常いうところの「正気」である。正気は邪気に対していう言葉で、生体内のすべての抗病物質を指すだけでなく、

図1 邪正闘争



臓腑・経絡・営衛*・気血の正常な生理機能も包括している。邪気は、すべての病原要因の総称で、外界の六淫の邪*だけでなく、生体内の陰陽（臓腑・経絡・営衛・気血を包括する）が失調することによって生じる病理変化（虚証など）や病理産物（瘀血、痰飲など）などの病邪も含んだ概念である。『素問』遺篇刺法論篇に「正気内に存せば、邪犯すことあたわず」。

とあるように、生体内の正気が充実していれば、外邪・内邪いずれであっても予防し、戦いに勝つことができるので罹病を免れうる。もしも、種々の原因で正気が虚衰していれば、外邪が虚に乗じて侵入したり、内邪が蜂起するため、各種疾患がもたらされる。すなわち、「素問」評熱病論篇にいうところの「邪が集まるところ、その気必ず虚す」である。これらのことから、正気には外邪を防御・除去する作用があるとともに、「精神」に内を守らせ、生体内の陰陽バランスを調節し安定させることによって、内邪を除去する作用もあることがわかる。さらに、正気は臓腑・経絡・営衛・気血の正常な生理機能を保持する。簡単にいうと、正気には邪気を払いのけ、陰陽を調節し、生体を保護する作用がある。

現代の免疫の概念は、「非自己」を識別し、それを排除することによって自己を保存するという意味にほかならない。これは、中医学でいうところの「正気」の作用と基本的に一致している。現代医学からいうと、免疫系には防御・ホメオスタシス・監視機構の3つの大きな機能がある。

防御機能は、各種微生物による感染への抵抗で、これはすなわち、正気の外邪に対する防御機能に相当する。

ホメオスタシス（恒常性維持機能）は、自己抗原や外来性攪乱要因を排除して、内部環境を安定化させ、免疫平衡を維持することで、これは、正気が陰陽を調節して内邪を取り除き、生体の陰陽平衡を維持する作用に相当する。

免疫監視機構は、細胞が突然変異して「異分子」になることを防止する機構である。生体の細胞が変化して「異分子」になると、免疫拒絶反応が働いてこれらの変異細胞を排除し、癌の発生を免れるようにする。中医的

*1 営衛 営気と衛気のこと。営は脈中をめぐる全身を栄養する作用がある。衛は脈外をめぐる身体を防御するはたらきがある。

*2 六淫の邪 風、寒、暑、湿、燥、火の六種の病邪の総称で外感病の病因の一つ。広義には六気の過多、過少、時期はすむをさす。

にいうと、これは正気が臓腑・経絡・気血相互の依存関係・制約関係をまとめることによって遂行される。「制するときはすなわち生化す」とあるように、正気は臓腑を調和し、経絡をスムーズに通じさせ、気血を流通させることによって、痰積・血瘀の形成を抑え「積聚」の発生を免れるようにさせる。「積聚」は現代の癌に包括される。明代の李中梓は、「積の成る者は、正気が不足することによって邪気がここを占拠する」ために起こり、したがって、「正気を養えば積はおのずから消える」とした（『医宗必读』積聚篇）。これは、正気に癌を防止し除去する作用があることを教示している。

これらのことから、正気には免疫系の正常な機能の概念も含まれていることがわかる。いうならば、免疫系の組織球が正気的重要な物質的基礎といえる。免疫系は、免疫器官（胸腺、脾臓、リンパ節など）と免疫担当細胞（リンパ球、マクロファージなど）が構成する整った複雑な防御体系である。ところで、すべての外来の病原微生物等の異分子や種々の原因で生じた変異細胞は、生体を刺激して免疫拒絶反応を生じさせるもので、中医学の邪気に相当する。したがって、免疫反応は「邪正闘争」によく似ている。免疫系の機能異常によって、免疫反応の亢進と減退が生じる。この種の免疫反応はアレルギー反応ともいわれ、生体に病理変化を生じさせ免疫疾患を形成する。邪正闘争で正気が勝てば病気はおこらない。正気が邪に勝たないか、闘争が熾烈であれば、疾病が発生する。

上述した「正気」と免疫能との関係、「邪正闘争」と免疫反応との関係は、いずれも中医免疫学と現代免疫学の観点が極めてよく似ていることを示している。歴史条件や研究方法の違いによって表現は異なるが、その実質は基本的に一致している。したがって、中医学は免疫について早くから深い認識があったことがわかる。

中医理論をもちいて免疫疾患を治療し新しい免疫製剤を探し出すためには、さらに一層正気に関する臓腑・経絡・営衛・気血と免疫との具体的な関係を探究する必要がある。

1. 衛気と免疫

中医学では、外邪の侵入を防衛する正気のことを「衛気」という。衛気には、皮膚・分肉の間をめぐって肌表を守り、汗孔の開閉をコントロールし、外邪に抵抗する働きがある。『靈樞』本藏篇には、「衛気なる者は、分肉を温め、皮膚を充たし、腠理を肥し、開合を司るゆえんの者なり」とあり、また、「衛気相せば、すなわち分肉解利し、皮膚調柔し、腠理緻密なり」と記されている。これでわかるように、衛気は皮膚・粘膜の障壁に相当する作用をはたす。いったんこのガード機能が減弱すると、外邪が侵入するようになる。すると、衛気が咽喉に奮い立って外邪との間に戦闘がくりひろげられる。もし、衛気が充実していて邪気の方が弱ければ邪気は侵入することができない。また、たとえ邪気が侵入してもすぐに衛気によって駆逐され発病しない。たとえば、『素問』生氣通天論篇には「風なる者は、百病の始めなり。清静なればすなわち肉腠閉拒し、大風苛毒ありといえども、これを能く害うことなし」とある。たとえ邪気の勢いが強くても衛気が充実していて腠理が堅く隙間がないようであれば、疾病は生じない。衛気が強く、邪気も盛んであれば、熾烈な戦闘がおこなわれるので生体に病的な現象があらわれる。『素問』瘧論篇には、「衛気のあるところ、邪気と相合し、すなわち病おこる」とある。もしも外邪が皮膚・分肉

の間に侵入すれば、衛気はすぐに外邪をとりかこみ、体内への侵入を阻止するとともに、外邪をせん滅させる。『靈樞』癰疽篇にも「寒邪経絡の中に客するやすなわち血泣く、……血泣いて行かず、行かざればすなわち衛気これに従いて通ぜず、壅遏して行くを得ず、ゆえに熱す、大熱止まず、熱勝てばすなわち肉腐る、肉腐ればすなわち膿となす」とある。もし、衛気が虚弱であれば、邪気は虚に乗じて侵入するが、それでも無力な衛気との間で戦闘がおこなわれる。しかし、邪強衛弱のために邪気を駆逐できず病邪が体内に居つづけられれば、いわゆる慢性病になる。『靈樞』刺節真邪篇では「虚邪の身に入るや深し。……結ぶところあり、気これに歸し、……結ぶところあり、深く骨に中り、気骨に因る」とある。ここでいう「虚」は正気の虚を指すとともに衛気の虚も包括する。「結ぶところあり」とは、侵入した邪気と正気が組み打ちして1つにつながることを意味する。「気これに歸す」とは、正気（衛気を含む）が邪気の集まるところに到達して邪気と争うようになることであるが、正気が虚して邪気に負けるようであれば、邪気はじりじりと骨にまで深く入るようになる。正気は次第に敗退するが、それでも邪気と歩調を合わせて進み終始邪気と戦いつづける。

以上でわかるように、衛気的作用は免疫防衛機能に似ているだけでなく、衛気と邪気が戦うことから免疫反応にも類似している。つまり、衛気は免疫系の防衛機能に相当する作用を有している。

『内経』の記載にあるように、衛気は皮膚・肌表に作用するだけでなく、体内の組織臓器を温煦（温める）・保護する役割も演じる。『素問』痺論篇では「衛は、水穀の悍気なり。その氣慄疾滑利にして脈に入ること能わざるなり。ゆえに皮膚の中、分肉の間に循って骨膜に薫じ、胸腹に散ず。その氣に逆らうときはすなわち病み、その氣に従えばすなわち愈す」と指摘している。『靈樞』衛氣行篇はさらに衛気について、「それ始めて陰に入るや、常に足少陰から腎に注ぐ。腎は心に注ぎ、心は肺に注ぎ、肺は肝に注ぎ、肝は脾に注ぎ、脾はまた腎に注ぎて周となす」とある。これらの記

* 1 分 肉 諸説がある。①筋肉が厚くて境界がはっきりしている所、②筋肉の赤白が分かる所、③大きな肉が深部で分かる所、④骨と肉が相分かれる所
* 2 腠 理 ①腠は毛孔、理は筋肉の筋目。②腠は三焦が元真を前会する処で、気血が注ぐ所。理は皮膚や鬚膈の筋目